

# 読者のページ

**主人の介護に思う**

千田町 横田 由美子

早いもので主人が病に倒れてから二年半が過ぎようとしています。振り返ってみますと本願寺念仏奉仕団として平成十七年十月四日の朝、本山参りは中身は異なるけど回数だけは善太郎さんに負けないと云ってとても元氣よく出て行きました。一泊三日の行程で初日は京都泊、最後は奈良のホテルで楽しいはずの夕食が主人の突然の病気で一瞬にして食べたか分からない程暗い雰囲気になってしまい、参加された御院家様はじめ皆様方には大変御迷惑、ご心配お掛け致しましたこと、深くお詫び致し、又お礼申し上げます。最初御院家さんから電話をもらった時は、そんなに深く思っていないませんでした、夜中病院の先生から連絡を受けた時には頭の中が真っ白になり、何で、どうして、と繰り返すばかりでした。それからが大変でした。毎日看病のため西宮の娘の所から奈良の病院まで急行で往復四時間、五つの駅を乗りかえなくてはならず、人と車の波の中、田舎者の私にとってはとても疲れました。奈良の駅前には(主人のために参拝を中止した)薬師寺があり、すぐお参り致しました。奈良に三か月間入院、玉造へ転院した時には島根に帰られ、家から通う事が出来るので気が楽になりました。三か月の入院後、半年振りに自宅に帰った時、「ここは本当に千田の清水屋か?」と聞き、主人

の嬉しそうな顔を忘れる事が出来ません。いよいよ自宅介護が始まり、朝、目が覚めると「今日も生かされている、なんまんだぶ」に始まり、日中何事も無いようにと私も頑張っていました、一ヶ月余りで倒れてしまいました。自宅に帰ってから次々と親類、同級生、知人とあまりにも不幸が続き、主人も精神不安定になり、私も笑顔がなくなり、二人して涙する日々が多く、どう接したらよいか分からず、阿弥陀様にすがると日々でした。そして月日が経ち今年に入ってから、笑いの日も多くなり、最近では心のゆとりも出たのでしょうか、自分が思い感じたことをすぐ短歌調にノートに書き、それを没にするのは可哀想なので私がA四の用紙に転記し、ベッドの前の壁に貼って時折読み返しています。私も主人もが倒れてから入院、介護と日誌を毎日つけています。ただ全介護のため浄光寺へお参り、お手伝いすることが出来ないのが残念です。主人も車イスで連れて行くべく、れと云いますので、いつか叶えられる日が来るのを念じつつ、日々介護に勤しみたいと思います。

あるお通夜のことです。その日のお通夜は沢山の参列があり、皆さんと一緒にひととき大きな声での正信偈の読経となりました。すると突然、その読経の声を掻き消すような大騒音が私のすぐ後ろで巻き起こったのです。「おぎゃー!おぎゃー!」赤ちゃんの泣き声でした。あまりにも大きな泣き声で、一瞬読経の音が止んだほどです。たまたま後ろを振り返ると、赤ちゃんはお母さんにしつかり抱かれてあやされていました。「泣く」ということを考えました。世界には人口の統計にも残らず、「消えていく」人々がいると、ある雑誌で読んだことがあります。つまり、生まれてすぐ捨てられる赤ちゃんが沢山いるんだそうです。まれに保護される赤ちゃんもいるそうですが、殆どはこの世での記録にも残らず、死んでいってしまうんだそうです。むい話です。

大病を わずらって知る何事も 他人の親切 心うれしき  
わが妻よ 看病の苦勞に感謝し 日々を送れる幸せなりし  
浄光寺 梵鐘の音よもつとひびけ 遠くで生かされてるわが子の胸に  
永代経 お参り出来ず目をとじて 手を合わせてるベッドの上で  
さつき晴れ 法座の轛場手伝え 元氣であればと手足なであり

横田 等



横田さん  
いつまでも仲良く  
お念仏してね。

### 《今月のことばの解説》

戦争と殺戮と競争を繰り返す欧米のやり方は限界にきました。アジアが世界経済を動かす今、東洋の思想、即ち不戦・非暴力・平等の仏教の教えが真の平和主義で、地球社会の未来を救うものです。お釈迦様のふるさと、インド・ネパールから平和の鐘を鳴らしましょう。仏様の教えを世界中に広めていきましょう。



仏教用語解説 no.32

# 正信偈六首引き和讃



浄土和讃 (五)

「比べるものない光」  
如来の十二の光 ④無対光

清浄光明ならびなし  
遇斯光のゆるなれば  
一切の業繋きのつじめ  
畢竟依を帰命せよ

### 現代語訳

一切の煩惱をはなれた、清らかなさとりより放たれる弥陀如来の光明は、いかなる諸仏の光明より優れていて他に比べるものがない。  
この光明にお会いして信ずる時、迷いの世界に繋ぎとめられる煩惱悪業はすべてみな除かれてしまふ。  
究極のよりどころである阿弥陀様に帰命しておまかせせずにはおられない。



### 若院ミニ法話

### 「赤ちゃんのお念仏」

能美顕之



あるお通夜のことです。その日のお通夜は沢山の参列があり、皆さんと一緒にひととき大きな声での正信偈の読経となりました。すると突然、その読経の声を掻き消すような大騒音が私のすぐ後ろで巻き起こったのです。「おぎゃー!おぎゃー!」赤ちゃんの泣き声でした。あまりにも大きな泣き声で、一瞬読経の音が止んだほどです。たまたま後ろを振り返ると、赤ちゃんはお母さんにしつかり抱かれてあやされていました。「泣く」ということを考えました。世界には人口の統計にも残らず、「消えていく」人々がいると、ある雑誌で読んだことがあります。つまり、生まれてすぐ捨てられる赤ちゃんが沢山いるんだそうです。まれに保護される赤ちゃんもいるそうですが、殆どはこの世での記録にも残らず、死んでいってしまうんだそうです。むい話です。

赤ちゃん、最初は泣くんだそうです。抱いてくれる誰かを探して。自分を受け止めてくれる胸を探して。しかしやがて泣くことを諦めてしまふ。そしてその時から、急激に衰弱していくのだそうです。何故ならいつしか受け止めてくれる支えがないと分かるから。いのちの支えがないと、人は泣けないのです。

人は「お前を引き受けた」という確かな支えがあるから、「泣ける」のです。その夜の赤ちゃんはお母さんの胸で、思いきり泣いていました。確かな支えの中で。お通夜の最後、皆さんの大きなお念仏の声の中、あれは赤ちゃんのお念仏だったのかも知れない、そう思いました。

私達の出会っているお念仏は、確かないのちの支えの上にいるからこそ出る「泣き声」なのです。私達、阿弥陀様の大きな胸に抱かれているのです。